

第 13 回すばる小委員会議事録

日時：12月25日（火）午前11時20分より午後4時00分（JST）

場所：国立天文台 解析研究棟 TV 会議室

出席者：有本信雄、市川隆、土居守、高田唯史、浜名崇、山田亨、山下卓也

欠席者：伊藤洋一、岩室史英、臼田知史、片坐宏一、小林尚人、定金晃三、
高遠徳尚、林正彦

書記：吉田千枝

1. SAC 委員の改選について

任期は2年で原則2期、半数ずつの改選となっている。台内委員候補者を選定し、台外委員候補者の推薦依頼を光天連に出す必要がある。

2. UM プログラムの確認

3. 国際協力について

3.1 委員長による概況説明

<STScI> 先週 HST 共同利用担当の I.Reid 氏が三鷹に来た。日本人はほとんど HST を使っていないので、積極的に共同利用に応募してほしいという話だった。

場合によっては WFC3 の試験観測に参加できる可能性もある。STScI とは再来年 Subaru-HST シンポジウムをやることになった。

<ASIAA> 3月4日ー5日に台湾の銀河研究者と合同 WS を開催することになっている。

SAC 委員には、委員会場でブレイクストーミングに加わるだけでなく、地方への情報発信の役割も担っていただきたい。

3.2 葉山で開催した第1回国際研究集会の総括：山田

すばる国際シンポジウムは「個々の成果が論文化されるのみならず、国際会議等の場で議

論され、淘汰され、あるいはコンセンサスとなることも含めてすばる望遠鏡の成果発信と言える」ことをふまえ、「そのような場を我々自らが主催して積極的に活動する」、という趣旨で開催した。ただし、研究会自体はすばるの成果を議論するためのものではなく、(すばるも重要な貢献が期待できる) 活発な研究領域でのサイエンス主体の研究会である。参加者は海外から 95 名、国内から 69 名の計 164 名、招待講演は日本人 3 名を含む 19 名、そのほかに 45 件の口頭発表 86 件のポスター発表があった。口頭発表の競争率は 3 倍以上と高かった。

まず、このような研究会自体を主催できたことが大きな成果だった。極端に目新しい成果と呼べるものは無かったかもしれないが、銀河の形成・進化全体を俯瞰するようなプログラムで、とくに学生などからはたいへん有用だったとの意見もあった。LOC の努力により、スムーズな運営ができたと思う。是非、今後も継続的に、分野回り持ちで「すばる国際研究集会」を続けて頂きたい。

3.3 UH/UKIRT

UH/UKIRT の日本時間枠は年々縮小され、今後望遠鏡時間の確保があやぶまれている。岡山 UM や光赤外専門委員会での議論も経ているが、すばる UM でも議論してもらいたいという要請が世話人からあった。

最近の議論は、科研費等でユーザー自身に予算を確保してもらった上で、天文台としてある程度のサポートを維持できないかというものだ。

C: 予算申請の際に「優先順位をつけるように」とよく言われるが、他の何と比べる必要があるのか、不明瞭だ。

C: UH/UKIRT のユーザーは、一部岡山と一部すばると重なっている。論文生産率は非常に高い。

C: ハワイ観測所の業務の一部と位置づけて予算の一部を回すことはできないか?

C: 院生教育や装置開発を促すという趣旨で国立天文台が進めていたが、プロジェクト制発足と同時に押し出されてしまった経緯がある。

C: 4M 望遠鏡へのアクセスを確保したいが、VLT との国際協力を進めれば ESO の中小の望遠鏡が使えるようになるのではないかな?

C: 南天になるが。

C: プリンストン大学にも 4M 級はある。積極的に他を探したほうがいいのではないかな?

C: すばるの TAC では「8M でやるサイエンスではない」として不採択にすることも多いので、そういった観測の行き場がなくなってしまう。またすばるユーザーの

裾野を広げるという観点からも UH/UKIRT は重要だ。

C : 院生教育の観点から 4 M へのアクセスは確保すべきだ。ハワイ観測所の業務の一環として UH/UKIRT を位置づけるべきだと SAC から所長に提言しよう。
(委員の同意)

3.4 国際協力に関するブレインストーミング

委員長 : すばるを使いたいと考えた内外の人が、観測所内の個人にコンタクトしてくるケースが多いが、すばるとしてもっと積極的に国際協力に打って出る時期にきているのではないか？時間交換が国際協力の一步ではあるが、その先がまだ見えていない。すばるを後生大事に守っていただくだけではなく、使いたい望遠鏡を使うという発想が必要だ。他の望遠鏡について各自が調べて観測申請を出すのは大変なので、システムティックに知る機会が設けられるとよい。

C : 確かに自分でどんどん外国の望遠鏡時間に応募してくれ、と言っただけでは、状況は進まないだろう。

C : すばるのレフェリーからのコメントで、すばるのプロポーザルのレベルが大変高い、というのがあった。研究者のレベル自体は外国に引けをとらないと思う。

(韓国との協力について)

C : 韓国とは、新装置製作の際に資金を出し合う等の協力が可能だろう。

C : 韓国には光赤外の観測家が結構いるので、これから観測家を育てたいという台湾とは状況が異なる。

C : 韓国にとって日本は協力対象の候補の一つで、唯一の候補というわけではなさそうだ。

(装置開発について)

C : 装置開発が途絶えてしまいそうな危機的状況だと思う。是非やりましょうという若手がない。

C : TMT で装置を作りたいと言う人は何人もいる。その試作をすばるで行うことも考えられる。

C : すばるを実験望遠鏡にする覚悟があるのなら、それもいいが。

C : WFMOS, HSC 以外の第 3 の装置を考え始める必要がある。

C : 近赤カメラか IFU だろう。

C : 可変副鏡+カセグレン視野を最大限活かした多天体分光器 (いわば、MOIRCS2) という可能性もあるのでは？MOIRCS の K バンドの多天体分光というのは、他の望遠鏡に先行しており、strong point を延ばすべきだ。

- C：大内レポートの公開後のステップが大事だ。
- C：我々から WF MOS の発想は出なかったと思う。
- C：それは製作費がないからだ。
- C：WF MOS をすばるに搭載するのなら、Gemini の既存の装置を使うだけでなく、Gemini に新装置を作ることも考えられる。
- C：新しい装置をどの望遠鏡につけようか、と言う発想があってもいい。

(時間交換について)

- C：現在の Keck, Gemini との時間交換はまだ試行段階で、共同利用にあまり大きな影響のない夜数だ。
- C：双方で交換枠を広げようという段階にはまだ至っていない。
- C：すばるでは広視野分光の機能が不足しているので他の望遠鏡を利用したいが、分光と撮像を1対1で交換するのは、相対的にかかる時間を考えると分が悪い面もある。
- C：外国人はすばるで撮像をやりたがっているが、大きな成果を持っていかれる恐れもある。
- C：時間交換はマウナケアの望遠鏡に限定する必要はないだろう。装置を指定して、大型のプログラムの交換をするのはどうか？

(観測時間配分について)

- C：全望遠鏡時間の半分は共同利用の個別プログラムに使うという大原則があったが、あれは不変なのか？
- C：そのために大いにすばるの成果が上がったので、外国からも使いたいというオファーが来ているのだろう。その数字はフェーズによって変わるものではないか？
- C：国際協力には共同利用以外の 50%から観測時間を拠出するのか？
- C：そうするか戦略枠に取り込むかのどちらかだ。戦略枠は共同利用の 25%が上限という構想だ。

(国際協力のポリシー)

- C：国際協力の大原則は、資金提供と人的貢献を分けて考えるというものだったか？
- 委員長：MOU ベースのものと個別の共同研究を分けて考えるということだろう。
現状ではプリンストン大学と台湾だけが MOU ベースだが、WF MOS もいずれそうなるだろう。WF MOS の日本側コンタクトパーソンはその時点での SAC 委員長が妥当だろう。

4. 次回委員会の日程確認

2008年2月19日

- ・ 委員改選
- ・ HiCIAO 戦略枠
- ・ 大内レポートは分野別にDLできるように公開準備

=== 資料 ===

- 1 第12回すばる小委員会議事録
- 2 UMプログラム案